

## 生命表の研究は続く！己の消滅に向けて

「80まで生きられるのか！」と、ホッとした人は正しいか？

「まだそんなに生きんならんのか」と、ガツカリした人は・・・

人の生死は、生きるか死ぬかの二つに一つ???

人の生死は、生きるか死ぬかの二つに一つ、一天地六の賽の目と同じで（丁半博打を推奨しているわけ

ではありません。統計学の確率の話では、奇数偶数の

説明でサイコロを使うのが常なので、常に確率は五

分と五分と思いついていた人は、平均余命やら平均寿

命やらで、80歳過ぎまで生きるのが平均という話

に、戸惑ったのではないでしょうか。

「80まで生きられるのか」とホッとした人、「まだ、

そんな先まで生きんならんのか」とガツカリした人、

様々でしょうが、あらためて、「生命表」とはなにか

を、紹介します。

『生命表は、ある期間における死亡状況（年齢別

死亡率）が今後変化しないと仮定したときに、各年齢

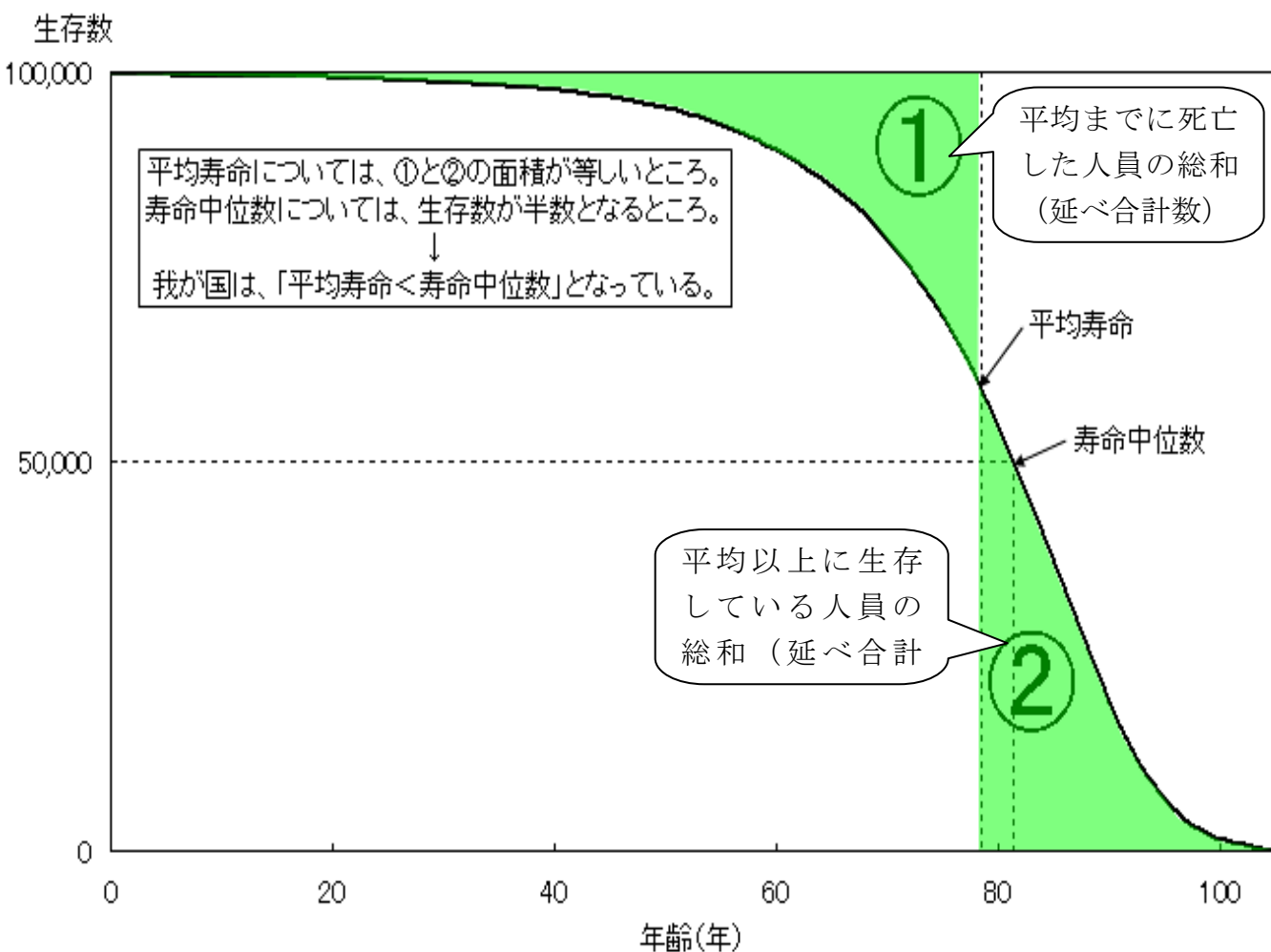
の者が1年以内に死亡する確率や平均してあと何年

生きられるかという期待値などを死亡率や平均余命

などの指標（生命関数）によって表したものの』

右の説明を、図で示したものが下のグラフ図です。

10万人単位で考えることになっているようです。



横軸を年齢にしてグラフを作成すると図の中の曲線に

なりませす。各年齢で死亡率が同一であれば、曲線ではなく、10万人のゼロ歳から、百何歳かの10万人の最後の一人の死亡の年を結ぶ、右下がりの一直線になります。

曲線のグラフは、若年齢層の死亡率は低く、高齢になると、死亡率が高くなることを示しています。

ある年に生まれた10万人が、半減して5万人になる期間(年齢)を、「寿命中位数」というようです。ここで、生死は五分五分ということになります。ある年に生まれた10万人のうち、「寿命中位数」まで生きる確率は5割というわけです。

ようするに、生命表というのは、先の説明の繰り返しになります。ある一定期間の各年齢の死亡状況から、各年齢の死亡率を算出して、現に生きている人たちの各年齢における余命や平均寿命を推定しているものです。

ですから、各個人について、平均寿命や、平均余命までの生を保証するものではありません。その歳まで生きられると期待しても、誰からも笑われない、バチあたりではないという程度のものです。

ただし、夜間宿所利用や野宿状態では、平均寿命や平均余命は、別世界の話です。平均寿命を、自ら縮めるのは、もったいなくありませんか。余計な一言かもしれませんが

生活保護は、無差別平等、困窮の事実に基づいて、誰でも(永住権を持つ外国人を含む)活用することが出来ます。65歳以上でなければ、あるいは病気でなければ受けられない、というのはウソです。

大阪市立更生相談所(市更相)は、阪堺線の東側、公衆便所横のガードを東に抜けて、交差点を渡ったところにある建物です。

医療センター(大阪社会医療センター)は、「ある時払いの催促無し」、借用書で受診できる医療機関です。市更相あるいは西成労働福祉センターで診療依頼券をもらってから行く必要があります。

医療センターは、センターの建物外の東側に入り口があります。

「自助努力援助のための手引き書—生活保護は怖くない」(無料)をまだ受け取っていない人は、声を掛けてください。

ちょうどx歳に達した者がx+n歳に達しないで(ようするにx歳を超えないで)死亡する確率を、年齢階級[x, x+n]における死亡率という。

x歳における生存数Lx人について、これらの者がx歳以降に生存する年数の平均をx歳における平均余命という。

0歳における平均余命を平均寿命という。生命表上で、出生者のうちちょうど半数が生存し、半数が死亡すると期待される年数を寿命中位数という。